

オキナグサ

牧 幸 男

里山が少しずつ新緑をまとう頃、日当のよい土手や草原にオキナグサの花が咲きだす。外面が白い絹毛で覆われ、うつむき加減に咲く暗赤紫色の可憐な花は、一度目にするとは何時までも記憶に残る植物となる。私の子供の頃は珍しい植物でなく、いわゆる雑草程度の印象であった。しかし、最近ではオキナグサは貴重な植物となり、庭や植物園で観賞用に目にする程度になってしまい、レッドデータブック (RDB) に掲載されるようになってしまった。なぜ、オキナグサが絶えてしまったか不思議である。恐らく多く自生していた草地は、除草剤の使用、農地の荒廃や開発が進んだことに加えて、山野草ブームで、移植に不向きな性質を知らず、自己満足のため掘り取ったことが、幻の花にしてしまったのではなかろうか。



オキナグサ (生坂村にて)



白い絹毛で覆われオキナグサ

菅平の長野県薬草栽培試験地 (現長野県薬剤師会薬草の森りんどう) でも、昭和30年代には試験地にオキナグサが雑草のように生えていた。しかし、昭和40年代になるとすっかり影を潜めてしまった。

何処でも目にしたオキナグサについて、宮沢賢治には『おきなぐさ』と言う短編を書いている。この中でオキナグサを「うずしゅげ」と呼び次のように紹介している。「うずのしゅげを知っていますか。うずのしゅげは、植物学ではおきなぐさと呼ばれますが、おきなぐさという名はなんだかあのやさしい若い花をあらわさないようにおもいます。そんならうずのしゅげとはなんのことかと言われても私には



ツェルマツトにて

わかったようなまたわからないような気がします。」と記述し、更に「おきなぐさの黒朱子の花びら、青じろいやはり銀びろうどの刻みのある葉、それから六月のつやつや光る冠毛がみなはっきりと眼にうかびます。」とオキナグサについて詳しく説明している。

私はスイスでトレッキングをしていた時、牧場やいたる所でオキナグサを良く目にした。ツェルマツトの書店で購入した“Zauberhafte Wiesenblumen”でこの植物を調べたところ、このオキナグサは、プルサティッラ・ウェルナリス *Pulsatilla veralis* (ノルオキナグサ) と呼ばれている品種であることを知った。また、この図鑑には「全面的保護指定植物！」の記述があったので、乱獲があるのかもしれないと思った。一方、わが国の園芸用品種として人気があるオキナグサは、セイヨウオキナグサ *P. vulgaris* がほとんどである。

オキナグサは普通山野の日向の土地に生えるキンポウゲ科の多年生草本。根はまっすぐでやや多肉、疎に分枝し暗褐色。葉は羽状で深く裂け、花時には全体に長い白毛が密生している。4月頃莖を10cmくらいに伸ばし、その先が一方にかたむき、點頭して暗褐色の花を1個付ける。外面は白色の絹毛で被われている。花が終わると多数の雌しべが白い羽毛をかぶって毬状となり、老翁の白髪頭のようになる。風が吹くと次第に吹き飛ばされて行く。その頃、莖は成長して花梗を入れて30cmくらいになっている。



園芸種のセイヨウオキナグサ
(南牧村にて)

この植物は世界各地に自生しているが、生育地により少しずつ違っている。このため生薬として流通している品も日本産、中国産、韓国産に微妙な違いがある。一方、花の時期、花が散った後の姿が鑑賞用向けのため、園芸用に改良され種類も多い。わが国でも、江戸時代に品種改良が盛んに行われ、不老齋が著した図説『八翁草』(1849)に詳しく示されている。

また、植物の翁草と直接の関係ないが、江戸時代に主として神尺杜口(1710~1795)が書いた前編、後編をあわせた全200巻の『翁草』(1772~1791)と言う随筆がある。この書物を参考に、様々な随筆や小説があるので一部を紹介する。よく知っているのは森鷗外の『高瀬舟』や『興津弥五右衛門の遺書』、菊池寛『入れ札』等が着想を得たと推定されている。

わが国固有の植物であるが、昔は詩歌の対象にする人が少く明治以降に取り上げられるようになったが、万葉集には一首が根都古具佐草の名で収載されている。

芝付の 美宇良崎なる 根都古具佐 相見ずあらば 我恋ひめやも 作者不詳(万葉集)
土の香の なにかたのしく 翁草 飯田城彦

牧野富太郎博士はこの植物名について「翁草の意味で、果時に長花柱が集まっている状態がちょうど老人の白髪のようなから。漢名は朝鮮白頭翁をあて、白頭翁は中国に産するヒロハオキナグサの名である。」と述べている。しかし、『本草和名』(916)や『和名類聚抄』(918~938)では白頭翁の漢名をあげ、和名を「於木奈久佐」をあてているので、詮索は不必要であろう。別名はネコツグサ、ネコグサ、ウバシラガ、オジイノヒゲ、オチゴバナ、チゴグサ、チゴチゴ、フデクサ、ゼガイソウなど沢山あり、昔は身近な植物であったことが分かる。また、地方によってはオバシラガ、ハシラガ、カワラノオバサン等の呼び方があるが、なぜか女性を指す呼び方が多いのか理由は不明である。名前の由来は、花の後にできる瘦果から浮かぬ情感をそのまま表したのである。ゼガイソウは、謡曲の赤熊を着けた是界坊に因んだ名前である。ネコグサについては「古義」(昔の解釈)では猫草と呼び、使用部分から根っこ草になった記述もある。学名は *Pulsatilla cernua* で、属名は「打つ、鳴る」の意味で鐘形の花の姿から、種小名は「前屈みの」意味でうつむきかげんに咲く姿を示している。

薬用の歴史は古く『神農本草経』(250~280頃編纂)の下品に生薬名を「白頭翁」と掲載されている。陶弘景(456~536)は「根に近い部分に白茸があって、その状が白頭の老翁のようだから名付けられたのだ」と述べ、蘇敬(599~675)は「葉は芍薬に似て大きく、一本の莖が引きでて、その先端に木蓮花に似た紫色の一個の花を開く。実は大きいもので鶏卵ほどもあり、一寸余りの白毛があってそれが一揃いに下がった様子は藁(籾ご)のようで、まさに白頭の老翁に似ているから、かく名付けられたのだ」と述べている。わが国でも、根を生薬名「白頭翁」と呼び日本古来の「和方」にも収載されている「白頭翁湯」の処方は良く知られている。効能は消炎性収斂、止瀉剤として、赤痢などの出血性、熱性の下痢に良く用いられていた。他に根をすり下ろして湿疹や痔、たむし、しらくも等の外用剤として利用してきた。現在は、セイヨウオキナグサ *P. unlaris* のエキスを前立腺肥大の薬として利用されている。

花言葉は「何も求めない」「背信の愛」「告げられぬ恋」「清純な心」等である。